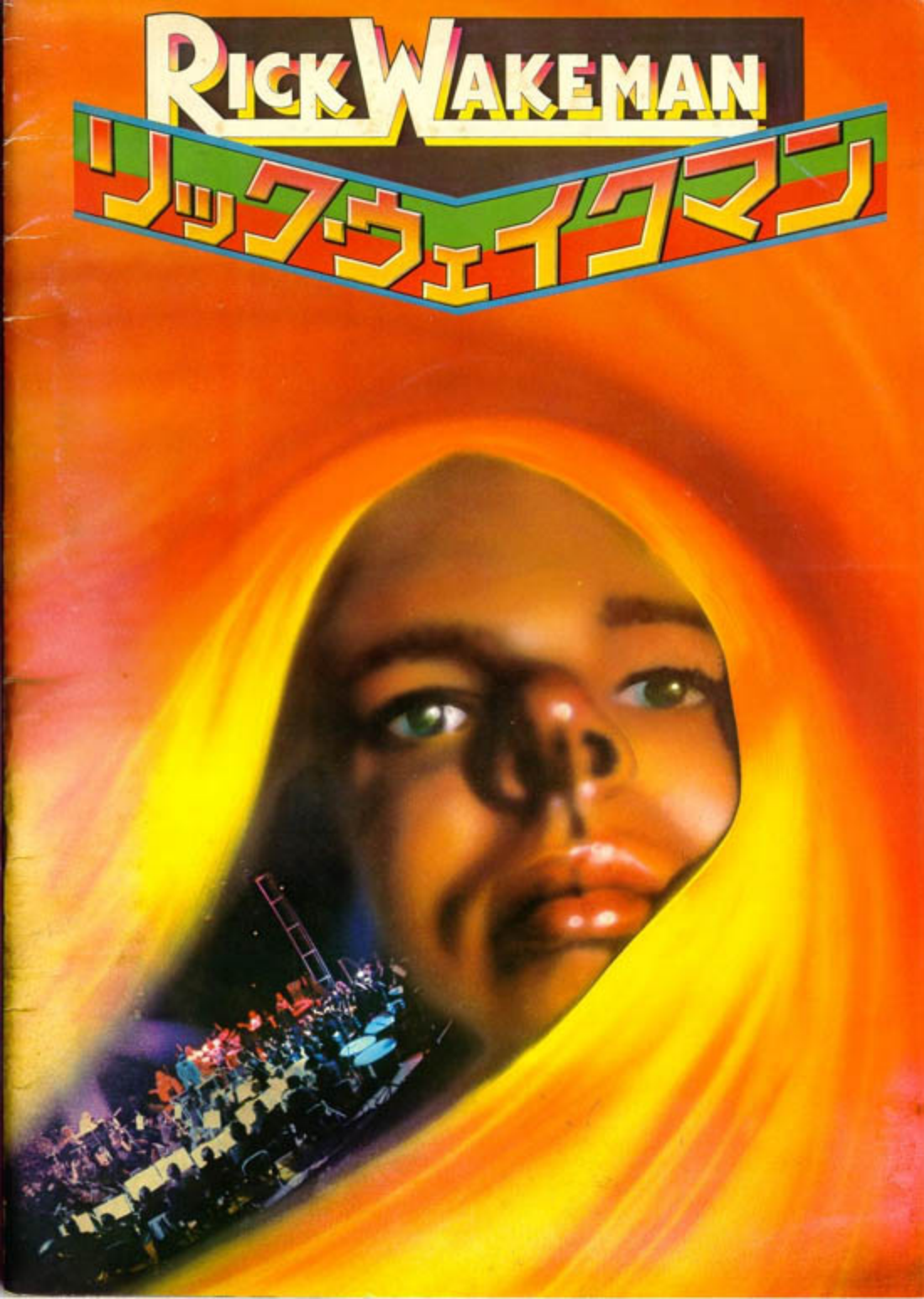
RICK WAKEMAN

リック・ウェイクマン



AN UDO ARTISTS. INC. PRESENTATION 1975
ロック・エクスプロージョン'75　第1弾ニュー・イヤー・スペシャル

RICK WAKEMAN

1月16日	東　京	サンプラザホール	主催★ニッポン放送／ウドー音楽事務所
1月17日	東　京	渋谷公会堂	主催★ニッポン放送／ウドー音楽事務所
1月19日	東　京	サンプラザホール	主催★ニッポン放送／ウドー音楽事務所
1月20日	大　阪	厚生年金会館大ホール	主催★ウドー音楽事務所
1月21日	〃	〃	〃
1月22日	名古屋	市公会堂	主催★中部日本放送
1月24日	東　京	厚生年金会館	主催★ニッポン放送／ウドー音楽事務所

招聘★ウドー音楽事務所
後援★平凡パンチ／ミュージック・ライフ／キング・レコード
協賛★日本楽器／ヴァン ヂャケット

写真提供／20世紀フォックス映画社"地底旅行"より

ウドー音楽事務所
東京都港区南青山5-9-15 新共同ビル　〒107　TEL400-6536-8
大阪市北区堂島浜通2-17 円　羽ビル　〒530　TEL341-4506

PRINTING●ELUDEKIKAKU
DESIGN●FACTORY(BLACKSMITH/T.OKABE)

●リック・ウェイクマン
RICK・WAKEMAN

●Hamond Organ
●Fender RMI
●Electric Piano
●Melotoron
●Moog
●Honky-Tonk Piano
●Grand Piano

★スペシャル・ゲスト★SPECIAL GUEST●

●ディヴィッド・ミーシャム
DAVID MEASHAM
(ロンドン・シンフォニー・オーケストラ常任指揮者)

●TERRY TAPLIN
(ナレーター)

JOHN HODGSON
●Percussion

BARRY FLATHER
●Drums

JEFFERY CRAMPTON
●Lead Guitar

ROGER NEWELL
●Bass Guitar

GARY HOPKINS
●Vocals

ASHLEY HOLT
●Vocals

●シャンブル・サンフォニエット
CHAMBRE SYMPHONIETTE
(シンフォニー・オーケストラ)

●東京放送合唱団

ロック界のスーパースター、天才児リック・ウェイクマン

第一線のロック・グループが次々に来日するきょうこの頃のこと、どんな大物が来てもファンはそう驚かなくなったが、「ヘンリー八世の六人の妻」「地底探険」のリック・ウェイクマンがやってきて、シンフォニーを使ってイギリスでやった画期的な大コンサートを日本のステージに再現するという話をきいた時には、「それホントですか？」ときき返したのだった。ウェイクマン自身のグループに15人のシンフォニー・オーケストラと16人のコーラスを加えた70名の大編成で演奏されるウェイクマンのコンサートは、ありきたりのロック・コンサートとはわけがちがうからだ。

こんな大がかりなロック・コンサートは開びゃく以来のことだが、ウェイクマンは演奏をきかせだけでなく、彼独特のアイディアによる視覚構成をしてロンドンの聴衆をアッといわせたのだった。その初演のステージに並ぶミュージシャンの巨大なパック・スクリーンには、彼が編集した、突拍子もない映画が映し出されたりする。

奇しくもちょうど一年前の1974年1月18日、ロンドンのロイヤル・フェスティヴァル・ホールで演奏されたプログラムが、その時のままの編成、舞台構成、演出で日本のステージに再現されるというのだが、そういわれても仲々本気になれないのは当然である。

しかし、費用がかかり過ぎるという理由、事情からイギリスでだった3回しか開けなかったこのコンサート（フェスティヴァル・ホールで2回、クリスタル・パレスで1回）がレコードやニュースで国外でも話題になり、やがてニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンを皮切りにアメリカの大都市で初演の時の形で計22回演奏されたのだった。

その方式はコンサートを開く現地「オーケストラやコーラスを編成し、ウェイクマンのグループ7名と初演の指揮をしたロンドン交響楽団の音楽監督であるディヴィッド・ミーシャム、そしてナレイターには俳優のテリー・タップリン、その他演出スタッフが演奏旅行をするというやり方であったが、それで初演の時と何ら遜色なく演奏成果、舞台効果をあげることができたという。この方式により日本ではオーケストラはシャンブル・サンフォニエット・オーケストラ、コーラスは東京放送合唱団がこの大役を引き受けることになった。

プログラムは、ロンドンでの初演の時のそれに若干手を加えたアメリカのコンサートの形で演奏されることになっているが、まずウェイクマンのロック・グループだけの演奏する「ジャーニー」で始まり、ファースト・アルバム「ヘンリー八世の六人の妻」から「キャサリン・パー」「キャサリン・ハワード」「アン・ボーレン」の3曲が演奏される筈だが、ロンドンの「スター」紙のピーター・コダードによるとこのオリジナル・メンバーによる演奏のパートが最高だったという。音楽的にも100パーセント、ウェイクマンのそれを満喫できたからだそうだ。

このあと最新アルバム「地底探険」の抜粋曲となるが、ここでは同名の20世紀フォックス映画からウェイクマンの音楽に合わせたフィルムが映し出され、さらにはステージに雲に覆われた地底の岳が再現され、ドライ・アイスを使ったスモークや2頭の大恐獣が登場するなどスペクタクル的効果で聴衆のドギモを抜くそうだ。ここではテリー・タップリンがナレイターとして登場するが、英語によるナレイションはスーパーインポーズ方式でスクリーンに日本語訳が映し出されることになっている。

さらに予定としてはアルバム「アーサー王と円卓の騎士たち」からの抜粋が演奏され、最後にウェイクマンのグループによる「12番街のラグ」「チャールストン」メドレイなどとなるが、ここでは往年のスラップ・スティックス・コメディ（無声映画のドタバタ喜劇）の抜粋が映し出され、踊り子のコミカルなダンスもとび出すことになるようだ。

リック・ウェイクマンはことし26才という若さながら、まさしく天才的な音楽家であるとともに台本作家であり、舞台演出家であり、プロデューサーでもあり、今回のコンサートに演奏される曲の殆んどすべてが彼の作詞作曲に成り、オーケストレイションも自らペンをとり、自ら14種に及ぶキイボード楽器を演奏する。キイボード楽器といえば、彼の家には40台の異なったキイボード楽器をもっているそうで、今回の来日コンサートではピアノは別として、ハモンド・オルガン、フェンダーRMI、ホーナーのエレクトリック・ピアノ、メロトロン3種、ミニ・ムーグ2台、ホンキー・トンク・ピアノなど14種を持ってくるという。

このほかコンサートのためのアンプ・スピーカーなどと合わせると、その重量は45トンに達するという。このほか舞台のセッティングには3時間を要し、リハーサルも12時間以上15時間を要するという。

とにかくリック・ウェイクマンのロック・コンサートは、ドラマであり、ミュージカルであり、スーパー・スペクタクルであり、われわれがレコードからの予想をはるかに上廻る奇想天外なステージが期待されるのである。

野口久光

リック・ウェイクマン……その栄光の座への道

1949年■ 5月18日、ミドルセックスのペリヴェイルに生まれる。
■ 父親ピース・ウェイクマンは、テッド・ピース・バンドのピアニストとして活躍。

1953年■ 4才半になったリック、父親から初めてピアノの手ほどきを受ける。

1955年■ 6才になったリック、父親の勧めでピアノのレッスンを始める。

1963年■ 14才になったリック、セミ・プロ・バンドで仕事を始める。

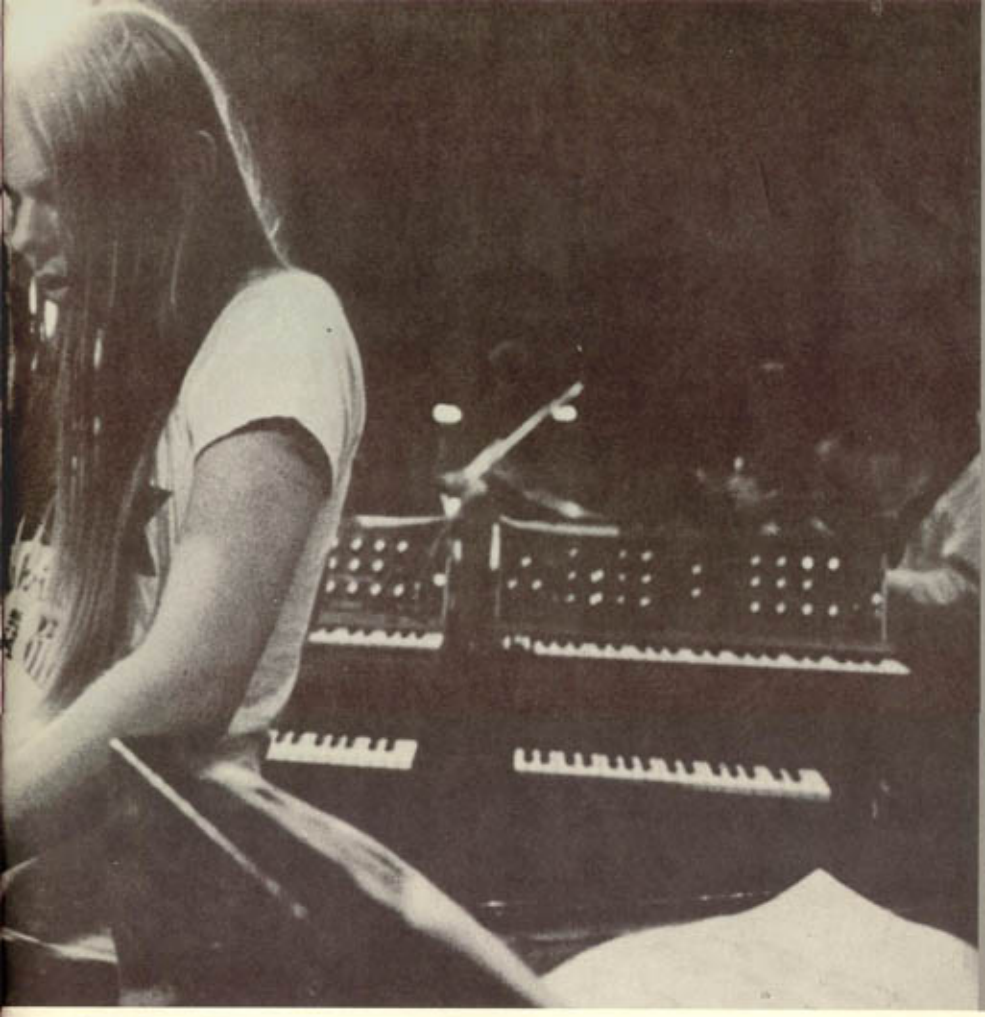
1964年■ ロニー・スミス・バンドに加入。

1965年■ 16才の時にコンサート・ピアニストになろうと決心するが、やがて断念する。

1967年■ ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックに通い始める。1年半、教職課程に費す。
■ その間、ピアノとクラリネットを学び、多くのキーボードをマスター。
■ 少しずつセッションの仕事を始める。当時の仲間は、
■ デニー・コーデル、トニー・ヴィスコンティといったプロデューサー。
■ デヴィット・ボウイやキャット・スティーヴンスのレコーディングに参加。

1969年■ デヴィット・ボウイのマーキュリーにおけるデビュー・アルバム「スペイス・オディティ」のレコーディングに参加。
■ トニー・ヴィスコンティのプロデュースによる、ストローブスのセカンド・アルバム「DRAGONFLY」のレコーディング・セッションに参加。
■ スピニング・ホイールというグループにオルガン奏者として加入。

1970年■ 2月～イースト・エンドのパブで演奏中、ティヴ・カズンズに見出される。
■ 3月～ダンス・ホール出演中に知り合ったロザリン・マリオンと結婚。
■ 4月～何回かストローブスのメンバーとセッションを重ねた後トニー・ヴィスコンティの勧めもあってストローブスに参加、リックの加わったストローブス最初のコンサートがパリで開かれる。この演奏旅行は、リックとロザリンのハネムーンでもあった。
■ 7月11日～トニー・ヴィスコンティのプロデュースにより、ロンドンのクィーン・エリザベス・ホールで行われたストローブス最初のソロ・コンサートがライヴ・レコーディングされる。これは、そのまま、ストローブス3枚目のアルバム、骨董品(JUST A COLLECTION OF ANTIQUES &



CURIOS）となり、発表と同時にストロープスの存在だけでなく、リックのオ能が高く評価され、一躍脚光を浴びることになった。「TIME」誌はリックのことを「The Instrumentalist Pop Find of the Year」と絶賛、各雑誌がリックのことを競って紹介した。

- 8月～ストロープス、イギリス国内演奏旅行。
- 10月～ストロープスのアルバム「奇怪品」リリースされる。

1971年■ 2月～トニー・ヴィスコンティのプロデュースのもと、ストロープス4枚目のアルバム「魔女の森から」（From the Witchwood）のレコーディングが開始される。リックはオルガン、ピアノ、エレクトリック・ピアノ、ムーグ、メロトロン、ハープシコード、チェレスタ、そしてクラリネットと全部で9つの楽器をプレイした。

- 5月～T・レックスのシングル"ゲット・イット・オン"のレコーディングに参加。
  ～アルバム「魔女の森から」リリースされる。
- 7月～ストロープスのアメリカ公演を前にリックは脱退。
  ～デヴィット・ボウイのRCAにおけるアルバム「ハンキー・ドリー」のレコーディング・セッションに参加。
  ～イエスのベーシスト、クリス・スクワイアからグループへの参加を要請される。
- 8月～トニー・ケイの後釜としてイエスに参加。
- 9月～ロンドン、アドヴィジョン・スタジオで「こわれもの」（FRAGILE）をレコーディング。
- 10月～アル・スチュアート4枚目のアルバム「オレンジ」（ORANGE）のレコーディングに参加。
- 11月～初めてソロ・アルバムの制作にとりかかる。
  ～イエス、「こわれもの」のプロモーションをかねた2度目のアメリカ公演を開始。
- 12月～ヴァージニアのリッチモンド空港からシカゴに行く飛行機の中で読んだ"ヘンリー八世の私生活"にヒントを得てコンセプト・アルバムを作ることを思いつく。

1972年■ 2月～それまでの試作テープをすべて破棄。リック自身、ソロ・アルバムは不可能だと

いう結論を出すが、問題の協ましにより、初めてソロ・アルバム「ヘンリー八世の六人の妻」レコーディングを開始。

- 2月～イエス、アメリカ公演を開始。
- 2月26日、長男オリヴァー誕生。
- 3月～イエス、アルバム「危機」のレコーディングを開始。
  ～テイヴ・カズンズの初のソロ・アルバム『忘れ得ぬ夏の日』(TWO WEEKS LAST SUMMER) のレコーディング・セッションに参加。
- 9月～イエス、5枚目のアルバム「危機」リリースされる。
- 10月～「ヘンリー八世の六人の妻」完成。
- 11月～イエス、3週間の予定で6度目のアメリカ公演を開始、各地で熱狂的な歓迎を受ける。バッファローに滞在中に、シンセサイザーの生みの親、ロバート・ムーグ博士に会う。
- 12月～リック、初のソロ・アルバム「ヘンリー八世の六人の妻」リリースされる。

1973年

- 1月～イエス、イギリス公演、ロンドンのレインボー・シアターでの演奏がライヴ・レコーディングされた。
- 3月～イエス、初めての日本公演でリックも一緒に日本へ来る。
- 4月～イエス、3枚組ライヴ盤「イエス・ソングス」(YES SONGS) をリリース。
- 「ヘンリー八世の六人の妻」全世界でヒット。
- 9月～メロディ・メーカー誌 '73年度 Pop Poll キーボード部門に於いて、リック・ウェイクマン第1位に輝く。

1974年

- 1月18日、ロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホールで「地底探険」のライヴ録音に成功。'74年ロック界最大の話題となった。
- 6月～「地底探険」をリリース。
  ～リック・ウェイクマン「イエス」を正式に脱退する。
  ～次作に「アーサー王と円卓の騎士たちを取り上げると発表。
- 11月22日、ABC-TVの"イン・コンサート"で「地底探険」を放映。

☆指揮者：デヴィッド・ミーシャムについて

- アンドレ・プレヴィンと共にロンドン・シンフォニー・オーケストラの音楽監督の肩書きを持つ。
- 英国室内合唱団の創設者。
- シドニー・オペラ・ハウスのオーケストラの編成者。
- ポピュラー方面の活動としては、ロック・オペラ〝トミー〟とニール・ヤングの〝ハーヴェスト〟でオーケストラの指揮を演っており著名になった。
- コンタクター&アレンジャー&ヴァイオリニスト。

リック・ウェイクマンの音楽家としてのたくましさ——

黒田恭一

シンフォニーオーケストラをまじえてのロックだからといってありがたがることはない。それだけのことなら、前例がないわけではないし、ことさらな試みともいえないだろう。いわゆる試みということだけなら、それこそあっちでもこっちでも、いろいろなことがなされ、正直のところ食傷気味で、またか！という気持になってしまう。まだまざまざまな目先のかわったことがあらわれるだろうが、いってみれば方便の変化は、いっけん、人目をひくようだが、ただそれだけのことでしかないだろう。

リック・ウェイクマンの、たとえば、「地底探険」は、ロンドン・シンフォニー・オーケストラが協演していたり、ナレーターがいたりするが、それのことでおもしろいというわけではない。あたりまえのことだけれど。肝心なのは、リック・ウェイクマンの音楽で、それがいいかわるいかでしかないだろう。そしてもうひとつ、いわずもがなのことながらいっておけば、シンフォニーオーケストラの響きを、はたしてその音楽が本当に必要としたかどうかということがある。

これまでにだって、シンフォニーオーケストラを導入して、さんたんたる結果に終った例がなくもなかった。たとえばエレキ・ピアノとカミニ・ムーグとか、もともと音をスピーカーから出すものの響きと、スピーカーなどというものがこの世になかった時代から存在した楽器がよりあつまっているオーケストラの響きとは、とかくとけあいにくく、へたをすると、とってつけたようになる。目先の変化だけを求めてシンフォニーオーケストラを導入すると、その辺で、音楽としてのひよわさを露呈してしまう結果になる。

リック・ウェイクマンの場合はどうか？これはシンフォニーオーケストラの響きの導入に成功した例だと思う。なぜ成功しているかというと、それを導入するにあたって、および腰になっていないからであり、シンフォニーオーケストラになしうることとなしえないことの判断が正しいからであり、なによりもまず彼の音楽が、真にその響きを求めているからだ。きいていればすぐにも、誰にもわかることだが、シンフォニーオーケストラが、私たちは本当はモーツァルトやベートーヴェンを演奏するためのものなのだが、今はたまたまロックをやっているんだといったようには、すくなくともここでは、響かない。

それはつまり、シンフォニーオーケストラの音が、リック・ウェイクマンの、一種の音楽的魅力によって、リック・ウェイクマンの音楽世界にひきずりこまれてしまっていることの、裏づけになるはずである。

いうはやさしく、実際に行うとなるとむずかしいことを、リック・ウェイクマンは、着着と行っているなと、そのレコードをきいていて思う。彼の音楽の感じ方に、とらわれたところのない自由さがあるからだろうし、個個の音楽への対応のしかたにしたたかさがあるからだろう。見せかけの効果とか、目先の変化とかをねらってのものではなく、すべてが、きまじめといっていいほどの、つまり本音の行いだから、たとえシンフォニーオーケストラのような、ロックミュージックが通常つかう楽器がもたらす響きとはあきらかに異状な響きをみちびき入れてこようと、そこにいきさかのあぶなげもない。

それと同じようなことは、「地底探険」で、いわゆる「クラシック音楽」のひとふしがつかわれている場合についても、いえるだろう。まさにそうしたものを、ひとつの素材として、つかいこなしえているがゆえに、その部分がうきあがっているかのような印象は、決してきき手に与えない。リック・ウェイクマンは、あらためていうまでもなく、まだ若い音楽家だ。にもかかわらず、その音楽づくりには、決して蛮勇とはちがい、また蛇におじけないめしいの勇気でもない、たくましさがあり、だからさまざまな要素をのみこんだ後にも、そこにリック・ウェイクマンの音楽の存在をたしかめられる。

WHITBREAD
WHITBREAD

初めて上演されるロック・シンフォニー

歴史に残る地底探険

寺村 敏

ひとつの曲なりグループなり、あるいはソロ・アーティストが〝すばらしい〟とか〝あまり良くない〟とか、ふだん僕たち（でなくてもだれでもそうだろうと思う）が話したり書いたりしているのは、よく考えてみると、かなり個人的な好みの問題で、客観的な基準ってあるのかな――などといつも迷って悩んだりすることが多いのだけれども……。

だから、僕がキング・クリムゾンやフォーカス、PFMを聴いて言葉にあらわせないほど感激しても、この種のものをあまり好きでない人は〝ふーん〟などと言っているだけで別に何とも感じないということらしい。

逆の場合も当然あり得るわけで、ストーンズの「イッツ・オンリー……」を僕が聴いて〝あれは単純で少し飽きるね〟などというと「へエ、世の中には変わった人がいるんだね」なんてびっくりされたりして……。

ただ、そんな僕でも、ときによっては、かなり客観的に〝音〟を見なくてはならないこともあるわけで、個人的なことはあとにまわしてその客観的な意味からまず――。

〝リック・ウェイクマンが来日する〟こと自体は、こんなにたくさんの外国人アーチストが来るようになると、それほど大きなニュースにはならない。イエスから独立したキイボード奏者が独自のグループを結成して――ということになってしまうわけで、もう少しはっきり言うと、ファン以外には興味のないものだろう。ところが〝日本で初めてロック・シンフォニー上演〟となると、これはバリューが全然変わってくる。

ロック編成のセクステットがオーケストラ、コーラスと共演してひとつのステージを作るのは、とにかく初めてなのである。リック・ウェイクマンがSF小説を曲にしたこと自体がニュースで、それをロンドン交響楽団といっしょにステージにしたことも大きなニュースで、そしてさらにこれが日本で上演されるということももっと大きなニュースで……つまり僕独特の言い方をすれば、日本の〝外人アーチィスト史上〟に残る大きな〝できごと〟であるということになる。

ビートルズ公演は何と言っても最大の史実なんだろうし、後楽園のドラマチックなピンク・フロイド、それからストーンズの来日中止もそうだ。賛を別にして郡山のフェスティバルもやっぱりひとつの歴史を作ったと思う。ニュースというのはそういう意味である。

社会現象と言ってもいい。ファンだけではなく、周囲の人にも目を向けさせることのできる〝できごと〟――「地底探険」上演はこういうとらえ方をするべきだと思う。

*　　*

さて、個人的な話に移ると――、「地底探険」を初めて聴いたときの印象はエルトン・ジョンの「葬送」やキング・クリムゾンの「ムーン・チャイルド」、そしてフォーカスとPFMと……きりがないのでこれ以上はやめるけれども、ちょうど同じ感激だった。何と言ってもクラシック音楽と切り離しては考えられないのである。ドラマチックで幻想的で、ダイナミックで……計算された音作りに感嘆した――と書いてしまうと味気なくなっちゃうが、すばらしいの一言に尽きてしまったことをおぼえている。

もちろん、これまでにない〝超(こ)えた何か〟があったからだが、それはライブという要素だった。

スタジオ録音なら、それほど珍しいとは思わないし、ロンドン交響楽団と知らなければそんなに注目しなかっただろうと思う。

そんなことからすっかりこのアルバムのとりこになってしまったわけで、だから前に書いた客観的なニュース性などなどの理由は別にして、最も彼らのステージを楽しみにしている1人である。総勢70人による初のロック・シンフォニー。これは確実に歴史に残るだろうし、日本のミュージシャンにも影響を与えるに違いないと思う。

（読売新聞文化部記者）

「黄金の指」があやつる鍵盤の群

中山久民

リック・ウェイクマンといえばキーボード、そしてシンセサイザーということになるようだ。ところが、その気になってシンセサイザーの構造だとか説明しようものなら、電子工学書みたいなことになってしまう。

問題なのは、リックやキース・エマーソンやアル・クーパーといった多くのキーボーダー達がシンセサイザーを使っているものの、シンセサイザーはこれまで楽器に対してわれわれが持っていたイメージのワク内ではつかまえることができない楽器だということだ。

これまでの楽器の構造は、叩いたり、はじいたり、吹いたりすることで空気振動を発生させ、この空気の振動を音源にして、共鳴体でその楽器特有の音色に加工・拡大してきた。そういった意味からこれらの楽器は古典的な楽器といえる。

さて、電気ギターなどのように古典楽器同様のアクションで、音源→電磁気を発生させ、電気信号になっている音声信号を共鳴体の働きをさせるアンプ(増幅器)で加工・拡大する楽器はどうかというと、これも古典楽器の範囲に入ってしまう。つまり、その音源が古典楽器の延長線にあるのだ。

問題のシンセサイザーになると、古典楽器の空気振動を起こしてそれを音源にするといったものとは異なり、電子的な発振を音源にする仕組みをもっている。

この地球上にあるあらゆる音を形づくっている物理的な要素である音量、音の高さ、音の立ち上り、音の余韻、持続音量、高さの連続的変化、音質といったものをコントロールできるなら、楽器音だけでなく自然音をもつくり出せる。これをやってのけるマシーンがシンセサイザーであり、「音の素」である電子発信音をコントロールして、楽器音やこれまでになかった音をつくるのである。

いつもわれわれが聞いている音程のある音楽をつくっている音(楽音)の高低は振動数で、音色はその波形で決まっている。楽器の音は、音の鳴りはじめや減衰するときの波形と、音の持続しているときの波形の間には多少の違いがあり、音量的にも鳴りはじめるときの立ち上がりや減衰の仕方で、それぞれの楽器の音色が決定されている。つまりシンセサイザーではオッシレーター(信号発信器)でつくられた信号をコントロールすることや、フィルターによって基本波形を変化させることができるといった働きで、すでにある楽音に最っとも近い音をつくれるということである。

シンセサイザーがもっている可能性が大きければ大きいほど、リックもいっているように「ほとんどのプレーヤーがシンセサイザーをこなしきっていない」という状態が起き、へたをすると、シンセサイザーを使ってどういう音楽をやったらいいか判らない金持ちのキーボーダーたちのオモチャになってしまう危険がそこにはある。

シンセサイザーだけに限ったことではないが、可能性の高い道具であればあるほど、その道具を使う「入間」の能力や創造性が有るか、無いかが問われるものはない。ことにシンセサイザーを使うには、演奏者は「どの音をつくるか決める」ことをせまられ、演奏する前にその創造性をまず問われるのである。

ところで、リックがはじめてシンセサイザーを弾いたのは、ストロープスのアルバム「魔女の森から/AML 117」のセッションでだったが、「あの時はボクも誰もが犯す間違いをしてしまった。ある曲のエンディングにピッコロ・トランペットの音を入れたかったので、スタジオにムーグを持ち込んで、ピッコロ・トランペットの音をレコーディングしたんだけど、お蔵でムーグを使う気がすっかり消えうせてしまった……」とリックは語っている。

とはいっても、リックは「ムーグは他の楽器の音をそっくり出せるようには作られてはいなかった。でも、ムーグは異なったサウンド・ソースを再現することができる。ボクが思うに、人間の声には100のソウスがある。だから、約1,000回の編集を繰り返せば人間の声が合成できるわけだ。これをどうしてもやってみたいと思ったんだ。……そこでボクはまず手始めに小さなシンセサイザーを使って、シンセサイザーというものを知ることにした。」――その結論が、「地底探険」で聞かせたシンフォニーとしか形容のしようのないあの全てを静かにインポルプレ、ロマンの引力で支配する音楽となっている。今やリックの自宅にはムーグ博士がリックのためにわざわざ作った特殊装置付きのムーグIIIPをはじめ、40台ものキーボードが点在しているという。

さて、リックが今回持ってくるキーボードには、ムーグ・シンセサイザーが3台、メロトロンが3台、ホーナーとRMIのエレクトリック・ピアノ、ハモンド・オルガン、グランド・ピアノ、RMIのハープシコード、ジャン

シンセサイザー

ミニ・ムーグ

オルガン

エレクトリック・ピアノ

ハープシコード

グル・ピアノ（リックはこう呼んでいるが、どうやらホンキートンク・ピアノのことらしい）の14台が含まれている。これらのキーボードをチラッと見てみると……。

〈ハープシコード（チェンバロ）〉

チェンバロといえばバロック音楽、そしてA.スカルラッティ、J.P.ラモー、G.F.ヘンデル、J.S.バッハという音楽家の名前が出てくるほど、16～18世紀のヨーロッパ音楽を代表する楽器である。

チェンバロのことを事典などでは〈16～18世紀に用いられた鍵盤のある楽器。ピアノの前身〉と説明してあるように、その構造もよく似ている。ただ、ピアノは鍵盤を押すと、ハンマーが弦を叩いて音を出しているが、チェンバロでは鍵盤に連結した爪が弦をひっかいて音を発生させている。このことは、弦の張力の違い（ピアノの場合は、1本90kgの力で張られている）もあって、ピアノの方が音が大きく、チェンバロは音を長く保持できないという欠点をつくっている。とはいっても、あのチェンバロの音色は実に魅力的だ。

〈エレクトリック・ピアノ〉

アコースティック・ピアノの弦のかわりに、エレクトリック・ピアノの場合はトーン・ジェネレーターという磁気を帯びた小さな鉄の棒を、鍵盤を押すことでハンマーが叩き、この振動をコイル（マイクの働きをする）がひろい電気信号に翻訳し、これがアンプ→スピーカーへと流れて行き音になる。こうした仕組みでエレクトリック・ピアノ独特の音がつくられている。

この仕組は基本的には、エレクトリック・ギターの弦とピック・アップの関係が、エレクトリック・ピアノではトーン・ジェネレーターとコイルになっているだけで、それ以後の電気信号の流れも同じだし、チョッとでもエレクトリック・ギターのことを知っているなら理解できるでしょ。弾けるかどうかはいざ知らず！

〈ハモンド・オルガン〉

この電子オルガンを始めハモンド社製の電子オルガンとはいわなくなっただけでなく、電子オルガンの代名詞にさえなっているハモンド・オルガンの第1号機をジョージ・ガーシュインが買っていらい、B－3、C－3といった名器はほとんどのキーボード族に愛用されている。

構造的にはピアノの弦にあたる部分に、一定の速度で回転している磁気を帯びたたくさんの円盤（トーン・ホイール）を使っていて、このトーン・ホイールはそれぞれ歯車のように連続した波形をしている。このトーン・ホイールの回転によって発生する電流のパルスをコイル（マイク）で電気信号としてとり出している。この電気信号が音になるには、スイッチの働きをする鍵盤をキーボーダーが押したとき、コイル（マイク）→フィルター（音色回路）→アンプ→スピーカーと流れていかなければならない。

また、ハモンド・オルガンのフィルター（音色回路）は、純粋の正弦波による基音や倍音をコントロールして、さまざまな音色をつくり出せる。

〈メロトロン〉

これは再生装置だけのテープレコーダーといえるもので、これ自体を楽器というには問題がある。というのは、メロトロンに内蔵されている鍵盤の数だけのテープに、どんなサウンドがレコーディングしてあるかが重要なのである。

例えば女性コーラスのテープをセットしておいて、ひとつの鍵盤を押すと、それに連動してテープが再生される仕組みになっている。したがって、3つの鍵盤を同時に押し、和音を出せるようになっている。もちろん、そのようにテープをセットしてあればの話だが。このセットするテープには、ブラス（トランペット、トロンボーン、サックス）やコーラス（男声4＆女声4）などの音が収められている標準仕様セットが、すでに何種類も用意されている。

つまり1人のキーボーダーが、メロトロンに内蔵させるテープによって、何10人もの演奏者の働きを可能にし、その演奏に、サウンドに厚みをもたせることができる。こうしたことから、今やメロトロンを使っていないキーボーダーのほうが、かえって珍しい位だ。

リックは「音楽にどうしても必要だからという理由だけで、シンセサイザーを使いたくないけども、これからはもっと使わなければならないと思う。メロトロンにしても同じことだ。「地底探検」でメロトロンを使わなかったのは、ストリングスにせよクワイアーにせよ、本物が使えたからだ」と、楽器の使いかたの基本姿勢について語っている。

「……変わった音を出すだけのものとして使われたら、シンセサイザーはすたれてしまうだろう。ボクは面白い音を出すことに反対ではないが、ムーグを演奏する者はその人なりの限界を設定して演奏している。非常にユニークな楽器なので、ベストを引き出すのは個々のプレーヤ次第というわけだ。とにかく懸命に研究しなければダメだ……どんなに研究しても、し過ぎということはない。

Mellotron® 400

大作「地底探険」を演奏したリック・ウェイクマン

メロトロンは録音テープを利用して生のオーケストラサウンドを創造する楽器です。何十人ものオーケストラサウンドをあなたの指で出してみませんか。

全国有名楽器店で発売中!!
ローンも取り扱っております。

●メロトロンを使用している海外主要グループ

Beatles	Pink Floyd	Nocturns
Rolling Stones	Kinks	Easybeats
Moody Blues	Shadows	Smoke
Blue Mink	Zombies	Onyx
Marmalade	Traffic	Rocking Berries
Beach Boys	Winder K. Fogg	Gracious
Herman's Hermits	Kiss	Elmer Gantry
Hollies	Trapeze	Stockridge
Jefferson Airplane	Salamanders	Ground Hogs
Yes	Wayfarers	Led Zeppelin
Collosseum	Manfred Mann	Grateful Dead
King Crimson	Gentle Giants	Fleetwood Mac
Strawbs	Spring	Barclay James Harvest
Fortunes	Idle Race	James Last
Graham Bond	Procul Harum	Urchins

CMC 日本総発売元

株式会社シーエムシー

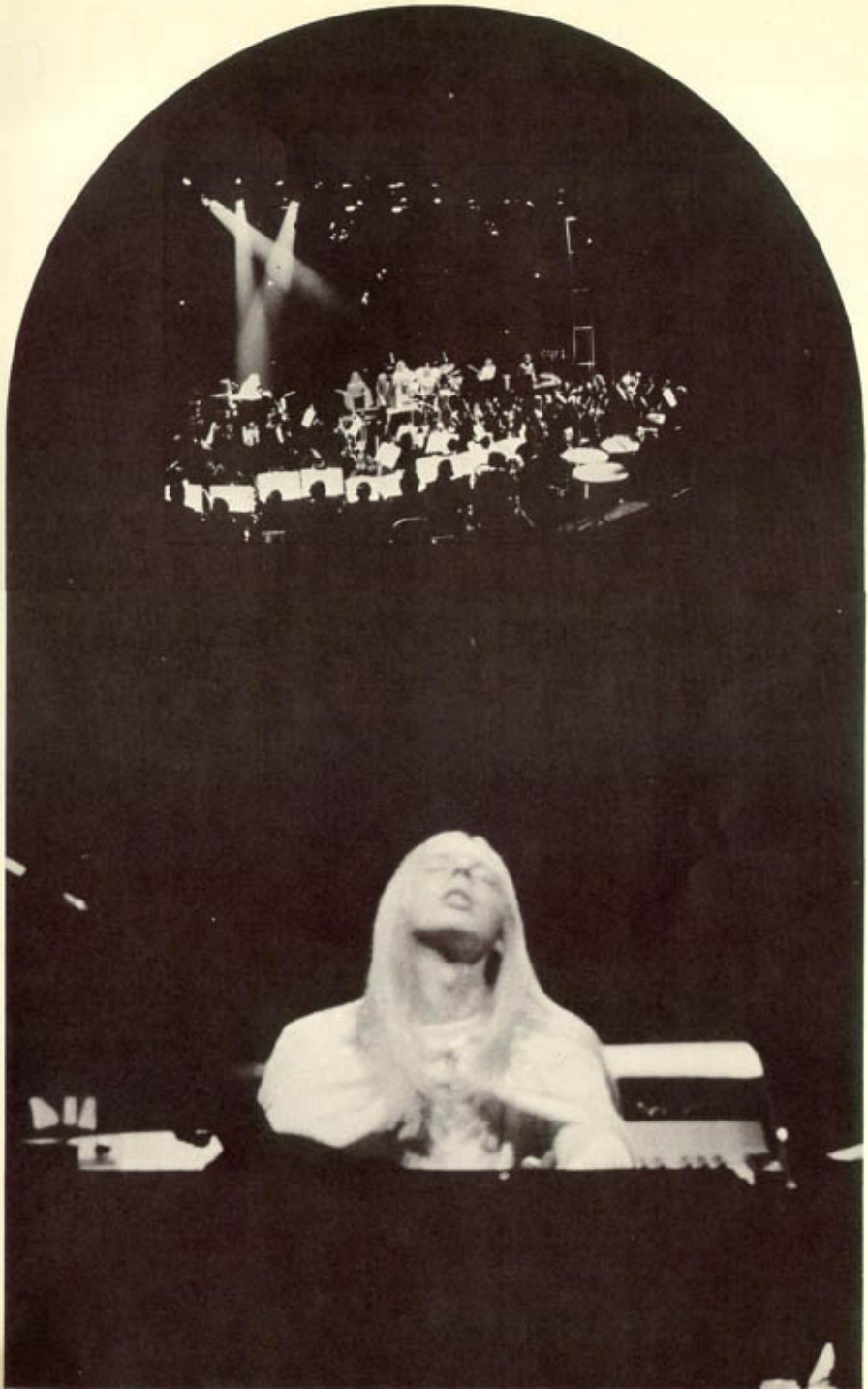
東京都港区西麻布3-21-20　〒106
霞町コーポ5F　TEL.(03)404-6527(代)

輸入元

コーンズ

アンド・カンパニー・リミテッド

東京都中央区日本橋2-3-10(丸善ビル)
〒103　TEL　(03)272-5771(大代表)



冒険また冒険

常に新しい何かを求めて歩み続ける男、リック・ウェイクマン

新春早々、リック・ウェイクマンが6人編成のコンボ・バンドと、ロンドン・シンフォニー・オーケストラの常任指揮者であるディヴィッド・ミーシャムとともに来日、日本人による45人編成のオーケストラと16人編成の合唱団を加えて、コンサートを開くといううれしいニュースと、リック・ウェイクマンが今度は「アーサー王と円卓の騎士」を音楽化するアイデアを実行に移し始めたという、これまた心躍るニュースを、ほとんど同時に聞いたのは11月の中頃のことだったが、僕は余りにうれしくて、丸1日かそこら何をやっても手がつかないような状態になった。そして、これが決して大袈裟な言い方でないということは、僕が「地底探険」「ヘンリー八世の六人の妻」というリックの2枚のソロ・アルバムにはじまり、イエス時代のアルバム、ストロープス時代のアルバム、果ては彼がセッション・メンバーとして参加しているレコードまでひっぱり出して、リックのプレイに聞き惚れたということを書けば、わかってもらえるだろうか。

とにかく、リックが今や最高のキーボード・プレイヤー、そして最も注目すべきアーチストの1人であることは、疑う余地のない事実といっていいだろう。4、5年前にはイギリスでも、まだほとんどその名を知られてはいなかったが、ストロープスからイエスへというグループ遍歴の上で確固たる名声を獲得してしまった彼のことを、ずっと追いかけ回してきた僕は、彼のプレイを聞きかえしてみて、今改めてそれを確信した。1970年5月にストロープスに加入したリックが、その年の7月11日、クイーン・エリザベス・ホールで聞かせた素晴しいキーボードのプレイを収めた、ストロープス3枚目のアルバム〝JUST A COLLECTION OF ANTIQUES AND CURIOS〟の繊細で美しい魅力は今なおその輝きを失っていないし、年が明けてすぐロンドンのスタジオで録音された〝FROM THE WITCHWOOD〟で聞けるより深味を増したリックのプレイは、時の流れを超えてしまってさえいる。

そして、1971年9月にロンドンのアドヴィジョン・スタジオで録音されたイエスのアルバム〝FRAGILE〟ではブラームスの〝交響曲第4番ホ短調第3楽章〟のスコアから各楽器の部分をそれぞれ各種キーボードに置きかえるという難事業をいとも簡単にやってのけ、多くのファンに感嘆の声を上げさせたリック。彼が加入してから、イエスが世界でも指折りのグループに急成長したことも忘れることはできないが、最も重要なのは、イエスのメンバーとしての活動と並行して制作、発表した初のソロ・アルバム「ヘンリー八世と六人の妻」、そしてリックがソロ・アーチストとして出発するきっかけになったともいえる「地底探険」を聞いた時、はっきりとわかるように、彼のキーボードはそれ自体ひとつの音楽であるということである。

ピアノに始まり、ハモンド・オルガン、エレクトリック・ピアノ、メロトロン、ムーグとキーボードと呼ばれる楽器は数あり、またエマーソン・レイク&パーマーの花形スターとして知られるキース・エマーソンを筆頭に、ロックの世界ではヴォーカリストやギタリストよりも人気のあるキーボード・プレイヤーも少なくはないが、リックほど音楽とは何であるかを、またキーボードひとつひとつの特性を完全に把握しているアーチストはまずいない。確かに、リックのただ1人のライバルであるキース・エマーソンも、キーボードの達人だ。ムーグを弾かせたら、まず右に出る者はいないだろうし、ステージでのエネルギッシュなプレイは、常に人気の的だ。

だが、リックの洗練されたフレーズと趣味のある和音の使い方、それに他の楽器との音の関係を知りつくしたそのプレイを聞くと、僕はエマーソンをどうしても№2の座に追いやらざるを得ないのである。

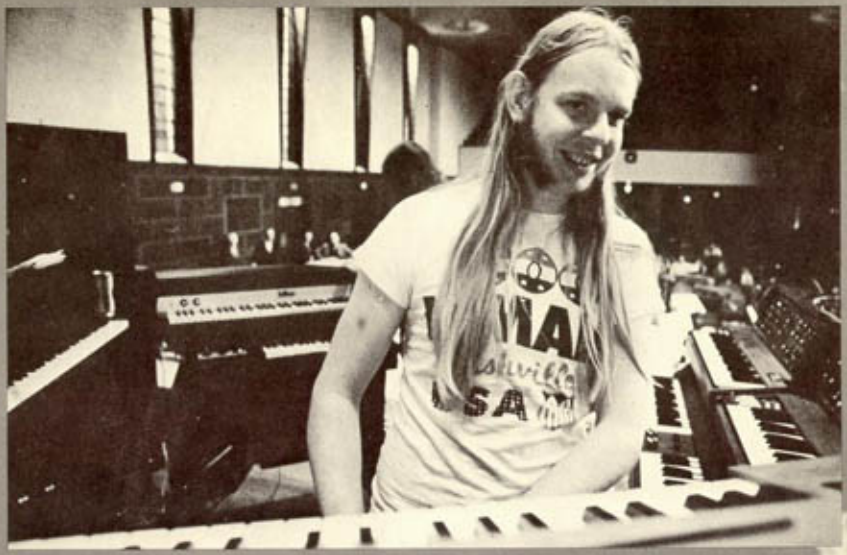
そこへもってきて、リックは常に前進することのみを考え、またそれを見事に実行しているから、他の連中がたばになってかかっても、ちょっとかないそうにない。イエスを突如として脱退したその理由は知らないが、ミュージシャン5人のコンビネーションで出来ることはやりつくされてしまったのではないかと考え、ストロープスを去ったというリック、そしてもう学ぶべきことがないから、ポップ・セッションには参加しないというその姿勢。だから、僕は現在の彼を、幾度もプラクティスを重ね、そして装備も完全なものにして出発した冒険者のようだとも思う。

かつて「本物のミュージシャンになるには、クラシックだけでなく、あらゆる音楽を聞かなきゃいけないんだ」という言葉を口にしていた通り、ロックとシンフォニーの融合というか、あらゆる音楽のエッセンスを吸収、融合したスケールの大きなサウンドを創造し、聞く者をその世界に引き込んでいってしまうリック・ウェイクマン。74年秋のアメリカ公演と新春の日本公演の合い間をぬって、リックは「アーサー王と円卓の騎士」のレコーディングを行なうというが、何と完成の暁には、イギリスのコーンウエル州のテインタジェルに実際に残されているアーサー王の城で、コンサートを開くことも計画しているとも聞いている。

1949年5月18日生まれというから、今度の春でようやく26才になるリックは、そうした年令を全く感じさせないほど、アーチストとして成熟している。そして、リックは次にはどんな冒険を計画しているのだろうか。

音楽の世界での冒険をしつくしてしまったようにも思えるリックは、近い将来、想像もつかないくらいのことをやってのけるに違いない。新春早々、リックのファンタジー・ワールドを直に旅することができるなんて、75年は最高の年になりそうだ。

——（音楽評論家）立川直樹



いい旅のお手伝い。
日航機は世界の43都市へ。

あなたはどちらへお出かけでしょうか。日航機は、東南アジア、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアなど、世界の43都市へ、東京をはじめ、大阪、名古屋、福岡、鹿児島、沖縄、新潟から飛んでいます。

日本から出発する航空会社では、一番の便数と路線網を誇る日本航空。お好きな日に、お好きな便でお出かけになれますから、ご便利です。ビジネスに、観光に、ぜひご利用ください。

JAL
日本航空

夜の12時。
テレビをつける。
たとえば一服しながら、
たとえばワインを片手に
高見の見物。
ウィーク・エンドは
フットボール観戦。
明日は土曜日……か。

We Love Sports.

VAN

-JAC-

〈VAN WE LOVE FOOTBALL〉
今、全国で放映中。毎週金曜日。午前0時。
HTB、NET、NBN、MBS、UHT(以上5局0:00)、MTB(0:20)、SBS(0:25)、KBC(土曜0:00)

VAN WE LOVE FOOTBALL

ロック・ジェネレーションのための

MUSIC LIFE

毎月20日発売　¥450

絶賛発売中！ＭＬ臨時増刊号

ロック・リーダー

¥600

●発行／ミンコー・ミュージック

AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1975

遂に実現

第2弾

ウイッシュボーン・アッシュ

WISHBONE ASH

2月18日(水)　名古屋　市公会堂
2月19日(木)　大　阪　厚生年金会館大ホール
2月20日(木)　東　京　サンプラザホール
2月21日(金)　東　京　サンプラザホール
2月23日(日)　東　京　サンプラザホール

驚異のスーパー・ライブバンド！
あのツィン・リードギターの威力が
炸裂する……

第3弾　75年の巨大な炎バッド・カンパニー

BAD COMPANY

3月3日(月)　東京　武道館大ホール
（日本ゆいつの一回公演）

ウドー音楽事務所
東京都港区南青山5－8－15　新井間ビル　〒107　TEL.400－6536－3
大阪市北区堂島浜通2－17　月　羽ビル　〒530　TEL.341－4506

あのビゼーの「カルメン」
奔放、妖麗、野性的な美女……カルメンも又恋劇だった。

いい音とは。

いい音楽に酔いしれる。求めつづけた音がいま、ここにある。D・Dプレヤーをはじめ最新コンポを組み合わせたマニアの新しいステレオ Technics YOU-07

4 高性能D・Dプレヤー ―――― SL-55

周囲が寝静まった深夜でも動作しているかいないか分からないほどの静寂さと、人間の判別能力をしのぐ回転ムラの少なさはD.D.このクラスではピイカクなほどの高性能です。

3 極至のすくないアンプ ―――― SU-3150

回路のあらゆる部分でひずみ発生の原因をとり除いています。忠実そのものの増幅。加えてデッキが2台つなげ、どちらからでもダビングできるなど、機能もマニア好みな設計です。

2 超音質重視設計のチューナ ―――― ST-3150

オーディオ機器として、忠実に信号をアンプに送り込むことを大切にして設計。音質の良さは好評を博していると同時に受信ついています。もちろん電波受信の性能も一流です。

1 スピーカも音質重視 ―――― SB-3005

コーン型3ウェイ構成で、深みがったなかにも自然で輝かな音色を実現。25cmウーハと大型キャビネットの採用で、低音の迫力も抜群。設置容ですから設置の難しさもありません。

Technics YOU-07 ユーオーセブン ―――― 全部 193,800円

D・Dプレヤー SL-55 標準価格42,800円 チューナ ST-3150 標準価格39,800円 プリメインアンプ SU-3150 標準価格44,800円 スピーカ SB-3005 ペア 標準価格33,200円 ペア
別売品 オーディオラック SH-402 ペア 標準価格16,000円 カセットデッキ RS-610U 標準価格46,900円 ※ネジ止め接続したものは組みとして組み立てるだけのもので、音質確認と、機能通電と機能で使用できません。

Technics YOU-07 ユーオーセブン

広い世界。巨きな音。

エレキ・ギター　SX-125
ピックアップ＝スーパーワイドレンジ型 #0056A×2
寸法1,000mm(全長)・重量＝3kg
色＝ナチュラル／レッド／ブラック／ブラウン
¥120,000
エレキ・ギター　SG-175
ピックアップ＝スーパーハンバッキング型 #3165A×2
寸法＝980mm(全長)・重量＝3.8kg
色＝ナチュラル／レッド／ブラック／ブラウン
¥135,000
ギター・アンプ　J-95
出力＝P.M.S.100W 200W(ピーク時)・チャンネル＝2ch
スピーカー＝ 30cm ×2
寸法＝597mm×708mm×250mm・重量＝29kg
¥115,000

日本楽器製造株式会社

リック・ウェイクマンの
来日記念盤は
キングレコードから
独占発売中!

RICK WAKEMAN
JOURNEY TO THE CENTRE OF THE EARTH

Recorded in concert at The Royal Festival Hall London
on Friday January 18th 1974 with The London Symphony Orchestra
and The English Chamber Choir conducted by David Measham
Production narrated by David Hemmings

地底探険

ライヴ

旅路／追憶／戦い／樹海

ロンドン・シンフォニー・オーケストラ／イングリッシュ・チェンバー・クワイア／他

●GP-226(ステレオ33㎝LP)¥2,500/カセット・テープAF-3008(2)/¥2,300

全のニューアルバムのテーマは
「アーサー王と円卓の騎士たち」
の予定です。ご期待下さい。

KING RECORDS

★ソロ・アルバム第一弾!!

ヘンリー八世の六人の妻

アラゴンのキャサリン／クレーヴのアン
キャサリン・ハワード／ジェーン・シーモア
アン・ブーリン／キャサリン・パー

●AML-173(ステレオ33㎝LP)¥2,300
●カセット・テープ-AF-3013(2)/¥2,300
(2月21日発売)

AN UDO ARTISTS, INC. PRESENTATION 1975